

## 学会 彙 報

(一九九八年六月～十月)

### ◇一郷正道先生歓迎会

六月三日(水) 午後六時より

於 瓢亭

本年四月よりお迎えした一郷正道先生の歓迎会を催した。教員十六名が出席。

### ◇研究発表例会

七月七日(火) 午後四時十分より

於 一二一教室

『サマントパーサーディカ』と漢訳諸律蔵——源泉の共通要素とその関連——

博士後期課程第三学年 奥村浩基氏

「中国仏教における『智度論』受容

についての一考察」

博士後期課程第三学年 采華 晃氏

「法蔵の十地品解釈について」

助教授 一色順心氏

### ◇修士論文中間発表会

十月二十二日(木) 午後四時十分より

於 一二一教室

今年度の修士論文提出予定者のうち、八名の院生が発表を行ない、活発な質疑応答がなされた。

## 編 集 後 記

『仏教学セミナー』第六八号をお届けいたします。遅滞気味であったセミナーの刊行も次号からは、ほぼ本来のペースを取り戻したいと思っております。会員の皆様のご理解を宜しく願います。

本号には、学内学外から論文二篇、書評二篇と講演筆録、特別寄稿三篇を掲載することができました。編集にご協力いただきました各氏にこころよりお礼申し上げます。

先日ある授業で、学生に「君たちにとって長電話とはどれぐらいか」と質問したところ、驚くことに「八時間ぐらい」という答えがありました。長電話が八時間なのですから、普段から数時間ぐらいの電話は当たり前ということなのでしょう。機械の発達は人間の生活様式を確実に変化させます。生活様式が変われば「当たり前」の基準も当然のことながら

変わります。そして日常的な言葉自体は絶え間なく変化しているのですから、一つの言葉に託された意味がどんどん変化していくことはむしろ当然のことなのでしょう。しかし、言葉や文字は一旦表現されると固定しますから、変化する事実にもそのままでは対応できません。学生に「仏教とはどういう事だと思いますか」と質問すると、実に千差万別、各人各様でほとんど收拾がとれません。このような状況の中でどれほど仏教の重要性を主張してもますます溝が深まるばかりです。この溝を埋めるのは、「仏教」という言葉をいかに現代的に解釈するかという問題ではなくて、現実の問題の中にいかに仏教的な要素を発見していくかという事なのではないのでしょうか。「仏教の現代化」なのではなくて「現実の仏教化」とでも言うのでしょうか。視点の一八〇度転換が必要だと思ふのです。だから、『維摩経』が「卑湿の淤泥に蓮華を生ずる」と説くのだと思ふのです。会員の皆様のご意見をお待ちしております。

(〇識)